

祈りの3つのタイプ

□ 「祈り」に関する学び全体のテーマ

1. 祈りの原則
2. 祈りの3つのタイプ
3. 旧約聖書の中の祈り
4. 新約聖書の中の祈り
5. 祈りの条件
6. 祈りの構成と内容
7. 祈りのルール
8. 祈りの諸問題

□ 「祈りの3つのタイプ」のアウトライン

1. 個人的な祈り
 - (1) マタイ 6 : 5~6 人に見せる祈り 対 正しい祈り
 - (2) 祈りの基盤
 - (3) 神のことばとの調和
 - (4) 「願う」と「ゆだねる」とのバランスについて教える聖書箇所
 - (5) 怒りや不満を含む祈りは受け入れられるのか?
 - (6) 個人的な祈りの手本
2. 集会での祈り
 - (1) 使徒 1 : 14
 - (2) 使徒 4 : 23~31
 - (3) 使徒 12 : 5、12~17
 - (4) 使徒 16 : 25
 - (5) 使徒 20 : 36
 - (6) 使徒 21 : 5
 - (7) 使徒 27 : 35
 - (8) 集会での祈りで、避けるべき10のこと
3. 終末期とメシアの王国における祈り
 - (1) 現代の信者が祈るべきこと=携挙についての祈り
 - (2) 大患難期前半期において信者が祈るべきこと=イスラエル民族の避難について
 - (3) 大患難期後半期において信者が祈るべきこと=メシアの再臨について
 - (4) メシアの王国の時代における祈り

注：終末期とは、メシアの初臨からメシアの王国に至るまでの時代のこと。聖書ではメシアの王国は「次の世」。終末期は、この世の「終わりの日々」（ヘブ 1 : 2）である。

祈りの3つのタイプ

第二 集会での祈り

1. 使徒 1 : 14

- (1) みな心を合わせていた
- (2) 祈りに専念していた=いろいろな出来事の時に必要に応じて祈りの（会合）を招集し、忠実に祈りを継続していた
- (3) 参加者は、11人の使徒たち、そして女性たちをも含まれる。当時としては珍しい、男女が共に参加する祈り会であった。
 - ① この中には、イエスの母マリヤもいた。
 - ② また、「イエスの兄弟たち」も。彼らはイエスの誕生後、イエスの母マリヤとその夫ヨセフから生まれた（マルコ 6 : 3 では、「ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン」の4人）。彼らは、イエスの死からこの時までの間の、どこかのタイミングで、信者になっていた。
 - そのうちの一人ヤコブは、使徒 12 : 17 では使徒ペテロが「ヤコブと兄弟たち（信者たち）」と言っているように、信者たちの代表格として名が挙げられるようになった。
 - 「ヤコブの手紙」は、エルサレムにいた信者たちの多くが迫害によって国外に散らされたとき（使徒 8 : 1、11 : 19）、エルサレムに残っていたヤコブが、国外に離散している信者たちに宛てた手紙である（ヤコブ 1 : 1~2）。その手紙には異邦人信者たちについての言及は全くない。使徒 11 : 19 にあるように当時の伝道対象はユダヤ人であり、パウロによる異邦人伝道が本格化する前。
 - 迫害する側の先頭にいたパウロが回心して数年後、初めてエルサレム教会の内部と接したとき、パウロが面会した相手は、使徒ペテロと「主の兄弟ヤコブ」（ガラ 1 : 18~19）であった。
 - また、使徒 15 章のエルサレム会議で結論を導いたのはヤコブであった（使徒 15 : 13）。

2. 使徒 4 : 23~31

- (1) 23 節 集まっていた信者たちに、使徒ペテロと使徒ヨハネが報告した。
 - ① 二人は収監されていた牢獄から釈放された。
 - ② 釈放にあたり、ユダヤ人の指導者たちは、今後は一切イエスの名によって語ったり教えるはならない、と命じた。
- (2) 24 節 a 「これを聞いた信者たちはみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った」
 - ① 「神に向かい」・・・これは、祈りである。

- ② 「声を上げて言った」・・・一人ひとりが黙って、あるいは小さな声で祈ったのではない。誰かが大きな声で祈る、続いてまた誰かが祈る、というように、これは、集まっていた信者たち全員による祈りである。
- ③ 「心を一つにして」・・・彼らは、その祈りにおいて、思いが一致していた。
- (3) 24節 b～30節 祈りの内容
- ① 「主よ」：ここでは、父なる神に呼びかけている。祈りは父なる神に対して。
- ② 「あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です」：天地万物の創造者、これもまた神の名のひとつである。この神の名をあがめることで、信者は神の主権と力を思う。神が天地万物をお造りになったのだから、神は私たちの祈りに答えることができる。この名をあがめることで、私たちは神が支配権を持っておられると確信できるのである。
- ③ 「あなたは、聖霊によって、ダビデの口を通して、こう言われました」：旧約聖書の中にダビデを通して語られた預言のことばがある。神が預言のことばをダビデの口を通して語ったとき、聖霊なる神が働いている。Ⅱテモ 3：16と合わせて、神のことばに対するこのような理解が祈りの基盤である。
- ④ 詩 2：1～2 の引用：この預言は、大患難期の末期、ハルマゲドンの戦いの中で起こる出来事についての預言である。
- ⑤ 27節 その預言を、ガリラヤの国主ヘロデとユダヤ総督ポンテオ・ピラト（ルカ 3：1、23：1～12）がイエスに対してしたことに応用している。
- ⑥ 28節 「あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを（ヘロデとピラトは）行いました」・・・神がすべてのことを支配しておられることを認める。その上で、次に、問題を神の前に祈る。29節 「主よ。いま彼らの脅かしをご覧ください」・・・彼らの脅かしとは、ユダヤ人の指導者たちが、使徒ペテロと使徒ヨハネを捕らえ、今後は一切イエスの名によって語ったり教えるはならない、と命じたことである。
- ⑦ 問題を語った次は、神への要求である。29節 「あなたのしもべたちに、みことばを大胆に語らせてください」 この集会の祈りにおいて信者たちが神に求めたことは、霊的な大胆さである。ユダヤ人指導者層からの公式の禁止に直面する中で、それでも福音を宣べ伝えていくという大胆さである。
- ⑧ そのような大胆さに伴う事柄がある。30節はそのような事柄を神に求める祈りである。「御手をのばしていやしを行わせ、しるしと不思議なわざを行わせてください」
- ⑨ 祈りの結びのことば「あなたの聖なるしもべイエスの御名によって」・・・イエスの名を通して祈る（ヨハネ 14：13～14、15：16）。
- (4) 31節 祈りに対する神の応答 2つ・・・【集まっていた場所が震い動いたこと】と【一同が聖霊に満たされ、神のことばを語る大胆さが与えられたこと】

3. 使徒 12 : 1~5、12~17

(1) 5 節 この集会の目的 「ペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた」・・・ペテロは処刑される危険にあった (4 節)。教会、具体的にはエルサレムの教会の信者たち、彼らもペテロと運命を共にすることを覚悟で集会し、父なる神に祈った。

- ペテロを捕らえたヘロデ王 (12 : 1~4) はヘロデ・アグリッパ 1 世。
 - 4 : 27 のガリラヤの国主ヘロデ・アンテパスとは別の人物
- ガリラヤの国主ヘロデは、ヘロデ大王とその 4 番目の妻マルタケとの子
- ヘロデ・アグリッパ 1 世は、ヘロデ大王のその 2 番目の妻マリアンメの系列の孫。
 - ヘロデ・アグリッパ 1 世は、3 人兄弟 2 人姉妹のうちの一。姉妹の一人はヘロデヤ。
 - ヘロデヤは、ガリラヤの国主ヘロデ・アンデパス、すなわちおじの妻となり、バプテスマのヨハネを斬首した。

(2) 12 節 この集会の場所は、ある信者個人の家であった。マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家。

- ① マルコは後年、「マルコの福音書」の記者となった人物。
 - イエスが逮捕されたときには、はだかで逃げた (マルコ 14 : 51~52)
 - パウロの伝道旅行に同行したが、途中で帰ってしまった (使 13 : 13)
 - 次の伝道旅行では、パウロはマルコをチームから外した (使 15 : 37~40)
 - しかし、その後、マルコは霊的に成長し、パウロから「彼は私の務めのために役に立つ」と評価されるようになった (Ⅱテモ 4 : 11)
- ② マルコを導いたのは、バルナバ (使 15 : 39)、そして使徒ペテロ (Ⅰペテ 5 : 13「私の子マルコ」)。マルコの福音書は、4 つの福音書の中で最初に書かれたもの。イエスとペテロとの間での出来事が詳しく書かれており、マルコがペテロから直接聞いて記録したものと推定される。

(3) 12~17 節 祈りに対する神の応答・・・6~11 節でペテロが救出され、ペテロはマリヤの家へ行った。

- ① 彼が家に着き、入り口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。
- ② ロダはペテロの声とわかり、喜びのあまり、門をあけもしないで、奥へ駆け込み、集まっていた信者たちに、ペテロが門の外に立っていると伝えた。
- ③ 信者たちはロダに「あなたは気が狂っているのだ」と言ったが、彼女はほんとうだと言いつ張った。信者たちは、「それは彼の御使いだ」と言っていた。
- ④ 一方、ペテロは門をたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。

(4) マリヤの家に集まって祈っていた信者たちの祈りは、このように聞かれた。しか

し、彼らの反応からわかるように、彼らが祈りの中で想定していたような展開ではなかった。祈りにどう答えるか、それは神が決めることである。

4. 使徒 16 : 25

- (1) 真夜中ごろ、パウロとシラスが祈っていた。この祈りには、神をほめたたえる歌も交えていた。
- (2) ここでは、祈る人は、パウロとシラスの二人だけである。この祈りは声に出しての祈りであった。他の囚人たちも聞き入っていたとある。
- (3) パウロとシラスがむち打ちの刑のあと収監された原因は、福音宣教と悪霊の追い出しであった（使 16 : 12~24）。
- (4) 祈りは、「神に祈りつつ」、すなわち、父なる神に対してなされた。
- (5) ここでの祈りは、他の囚人たち、すなわち未信者たちの前で、祈られたものである。

5. 使徒 20 : 36

- (1) 集会への参加者は、パウロ、そしてエペソの教会の長老たちである（20 : 17）。
- (2) 長老たちは、それまで、パウロの勧めと警告とに従ってきた。その内容は、18~35 節。
- (3) パウロがここで祈ったことは、今後も引き続き従っていくように。

6. 使徒 21 : 5

- (1) 集会への参加者は、パウロたち一行と、ツロの信者たち。ツロの信者たちは、それぞれが妻や子たちを同伴し、家族総出でパウロたちを見送った。
- (2) 集会は、互いに別れを告げるため。祈りは、パウロが無事にエルサレムに到着するように。

7. 使徒 27 : 35

- (1) ここでの祈りは、食事の感謝。
- (2) 「神に感謝をささげる」、祈りは父なる神に対してなされている。
- (3) 「一同の前で」：36 節ではその数は 276 人。この祈りを聞いている人たちの中には、信者も未信者も含まれている。

8. 集会での祈りで、避けるべき10のこと（筆者補足：特に牧師や教師が留意すべきこと）
- (1) 発声をわざと荘厳な調子にすること。英語圏では、神を通常は「ゴッド」と発音するところ、わざと「ガウド」と発音して祈る人々がいるそうです。
 - (2) 意味のない決まり文句を連ねること。英語圏では、「妻」という代わりに、「my better half（私のより良き半分）」といった決まり文句を、祈りでも連ねる人々がいるそうです。
 - (3) 「今まさに（just）」といった用語を繰り返すこと。「今日、まさに、我らを祝したまえ」、「まさにこの場に我らと共に神が在らんことを」、「今まさに我らはあなたを礼拝します」、「今まさに病にある者を癒したまえ」・・・
 - (4) 献金や伝道と呼びかける祈り
 - (5) 牧師が説教の代わりに祈りの中で会衆に教える内容を語り、会衆に聴かせること
 - (6) 「父よ」を連発する祈り。父なる神への呼びかけは最初だけでよい。具体的な祈りのことばがなく、ただ「おお、父よ。我らを恵み、あわれみたまえ。おお、父よ。あなたの子たちを守り給え。おお、父よ、父よ」と繰り返すだけでは、祈りではない。
 - (7) 「あなたは知っておられる」を連発する祈り。「あなたは私たちの心の中を知っておられる」、「あなたは、宣教の現場での状況を知っておられる」、「あなたは、伝道活動のための必要を知っておられる」、「あなたは〇〇兄弟が病院に入院していることを知っておられる」・・・このように、いちいち、神が知っておられると付け加える必要はない。
 - (8) 全世界的規模での祈り。食事の感謝をささげるときは、単純に自分と家族に今日の糧が与えられたことを感謝すればよい。神が全世界の人々に太陽の光、雨の恵みを降り注いで、人々に食べ物を与えてくださることからまず感謝して祈らねばならないと考える必要はない。（筆者補足：一見スケールの大きい祈りのように聞こえるが、これも荘厳な祈りにしたいという演出の一種である。）
 - (9) 聖書の約束を、文脈を無視して自分たちに当てはめること。誰に対して約束され、それはどういうときに成就するか、といった文脈を無視して、聖書のある箇所を握り、神にこのとおりに自分たちに実現してほしいと要求すること。このような要求は、神のことばに対する適切な姿勢ではない。
 - (10) まとめの祈り。牧師が礼拝説教のあとで祈るとき、聴いている会衆には、説教のアウトラインにそつてもう一度要約しているだけのように感じられることがある。祈りを、説教の結論やまとめを語る時間にしてはならない。